（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　　林　悠子（はやし　ゆうこ）

本論文は、『源氏物語』におけるさまざまな時間設定の方法を分析し、その方法が、緊密に構成された物語を展開してゆく上でいかに有効に機能しているかを解明したものである。本論は４部８章で構成されている。

第１部「人物造型と時間設定」は、この物語の人物造型には作中人物相互の対照による性格付けという方法が用いられていることに着目し、第１章「六条御息所の人物造型と時間設定」は、人物相互の対比を累積しながら時間を紡ぎ出しつつ人物の持続的一貫性を確保してゆく物語の方法を分析、第２章「浮舟物語の人物造型と時間設定」は、浮舟失踪後の薫と匂宮の動静を描く蜻蛉巻の時間と、小野の山里での浮舟を描く手習巻の時間とが、三か月ごとに対応していることを指摘し、そのような時間の枠組みによって、薫と匂宮、さらには薫と手習巻の中将との対照が鮮明になっていることを明らかにしている。

第２部「源氏物語の時間設定をめぐる文学史的考察」の第３章「「新春の哀傷」という発想―私家集から源氏物語へ」は、死と哀傷の描出においても画期的であったとされる『源氏物語』には、新たにめぐってきた春が喪失の悲しみをさらに鋭くするという表現様式が見られるが、そのような発想の原型はすでに先行の私家集に見出だされることを指摘し、第４章「求婚譚における時間設定の方法と展開」は、『源氏物語』の玉鬘求婚譚が『うつほ物語』のあて宮求婚譚の時間設定の方法に学びながら、それをさらに精巧に練り上げている様相を具体的に明らかにしている。

第３部「源氏物語の方法としての「喪」の時間」の第５章「夕霧物語の服喪と結婚」は、母の喪という重服中の落葉の宮との婚儀を強引に挙行する夕霧の言動を通して物語は、有力な後見のない女君の自立的に生き難い状況を克明に描き出しているとし、第６章「大君物語の服喪と結婚」は、父の喪に服している宇治の大君と薫との物語の展開が、落葉の宮と夕霧のそれとは細部に至るまで対照的であり、結ばれない男女の恋の物語となっていることを明らかにしている。さらに第７章「二つの「喪」の時間の物語としての蜻蛉巻」は、式部卿宮の姫宮が重服中でありながら女房として宮仕えせざるを得ない境遇が、同じ式部卿の宮の喪に服する明石の中宮との対比で際立たされていることを論じている。

第４部第８章「方法としての日付表現」は、この物語で月日が明記される事例について、そのように明記されることの意味を、それぞれの文脈に即して分析している。

物語本文の解釈にはなお再考を要する点もなしとしないが、公卿日記等の史料をも丹念に参照しつつ物語の虚構の時間設定の方法を精緻に解明した点は高く評価される。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。